

聖書:使徒の働き14章1～18節

説教:自分の足で、まっすぐに立ちなさい

はじめに

パウロはかつてユダヤ教のパリサイ派に属し、クリスチャンを見つければ容赦なく捕まえて牢に投げ込み、徹底的に教会を迫害していた人です。そんな人があるときよみがえられたキリストに出会うことで、ユダヤ教からキリスト教に回心し、今はキリストの福音を伝える宣教師となり、ピンディアのアンティオキアという町に向かいました。

彼はその町の会堂で、イエス・キリストこそ、旧約聖書で約束されていた救い主であると語ります。それを聞いてある者は信じましたが、他の者たちはパウロたちをねたみ、口汚くののしり、追い出しにかかります。そのとき、パウロはこのように宣言します。「私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」

## 1 イコニオン

### 1) 異邦人に向けて語る

ユダヤ人は、アブラハムの時代から神のことばを委ねられてきた民族です。そのことから、彼らは何度も迫害にあい、故郷を追われ、国が滅んでなくなってしまうということも経験しました。それでも頑なに神のみことばを大切に守ってきました。そんな人たちなのですから、旧約聖書で預言されていたイエス・キリストを誰よりも真っ先に救い主として受け入れるに違いないと思うのですが、そうしない。むしろ拒んでしまうのです。いったいどうして、と不思議に思います。パウロはそのことについてローマ書11章11節でこう書いています。「それでは尋ねますが、彼らがつまづいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルに妬みを起こさせました。」26節。「こうして、イスラエルはみな救われるのです。」

パウロが異邦人に向けて福音を語っていくのは、ユダヤ人のことを諦めたからではありません。異邦人が救われることで、やがてイスラエルも救われていく、それが神の計画なのだと思っていたのでした。

### 2) 主によって大胆に語った

アンティオキアを追われたパウロとその一行は、イコニオンという町に向かい、アンティオキアで

やったのと同じように会堂に入って福音を語りました。そうしたら、ここでもユダヤ人たちの激しい反対が起こり、迫害されてしまいます。

普通ならこんなふうを考えるのではないのでしょうか。「この町にもユダヤ人たちが沢山いる。アンティオキアと同じ方法で伝道したら絶対に同じ問題が起きる。もっと賢くならないければならない。ユダヤ人たちに反感を持たれないように、別の方法で伝道しよう。」ところがパウロはなぜか方法を変えません。ユダヤ人やユダヤ教に改宗した外国人の前に立って真正面からぶつかっていく。パウロは愚かなのか。

そんなことはありません。3節にこう書かれています。「それでも、二人は長く滞りし、主によって大胆に語った。主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。」パウロの方法は、人の目には愚かに見えるかもしれませんが、でも、主が証しされているのですから、これが最善の方法であったと見るべきでしょう。

### 3) 町から逃れる

そうは言っても納得できないことがあります。5節のことはどうでしょうか。「異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒にになり、二人を辱めて石打にしようとした。」それで他の町に行って難を避けた。真正面から戦うのは格好がよいかも知れませんが、結局逃げなければならなくなった。周りの人たちはどう思うか。キリスト教は弱い、負け犬という印象を人々に与えてしまう。それでは逆効果ではないのか。そんな意見も出て来そうです。でも、このことも神のご計画の中で進められているはずです。どう考えたらよいのでしょうか。

## 2 リステラ

### 1) 生まれつき足の不自由な人

二人はイコニオンの町から歩いておよそ半日ばかり離れているリステラにやって来て、すぐに福音を語り始めるのですが、その時の様子が8、9節に書かれています。「さてリステラで、足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。彼はパウロの話すことに耳を傾けていた。」

体に障害をもって生まれる、あるいは後から障害を負ったからだになる。それがどういうことなのかは経験した者でなければわからないことでは

う。私の小さな経験から言えば、私の生まれ育った家には知的障害を抱えた叔母と一緒に住んでいました。おそらく耳も満足に聞こえなかったと思います。祖母は、娘を病院に連れて行くこともできず、障害を負わせてしまったその悔しさ無念さを孫の私に繰り返し語っていました。叔母は意味のあることばを言えませんでした。夜になると布団の中からうめく声が聞こえてきました。あれはなんだったのかと今も思い起こします。

生まれつき足の不自由な人も、うめき続けていたのではないかと思います。そんなときパウロが語ることばが耳に入って来ました。

## 2) 癒されるにふさわしい信仰があった

パウロはどうしたか。9節後半から。「パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て、大声で、『自分の足で、まっすぐに立ちなさい』と言った。すると彼は飛び上がり、歩き出した。」

皆さんの聖書には「癒やされるにふさわしい」というところに米印があり、下の欄に「救われる」とも訳されると書いてあります。細かく言えば、この人は救われた結果、癒やされる。そういう順番です。

この人は、自分の口で「主イエスは救い主です」と告白したわけではありません。ただパウロがじっと見つめて救われる信仰があると分かった。それが具体的にどんな事であったかは書かれていません。体に障害を負っている、病気である、足が不自由であるというだけで罪ある者とされ、死んでいるのと同じと見なされてしまう時代でした。それだけではない。「おまえがそんな身体で生まれてきたのは、おまえの先祖がなにか悪いことをしたからだ。」似たような経験を皆さんもお持ちかも知れません。そんなことを言われるとますます傷つきます。

そんなときパウロが語ることばが聞こえてきました。死からよみがえられたイエスはを信じる者は、この方によってどんな者でも義と認められる。あなたの罪は赦され、もはや死んだ者ではない。死からよみがえる生きた者とされる。これを聞いて足の不自由な人は考えたでしょう。本当だろうか。もし本当なら、自分もそうになりたい。でもどうやったらいいかわからない。とまどっていた。パウロはその表情を見て、「救われるにふさわしい信仰」があると見て取り、すぐに大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と叫ぶと、そのとおりになります。

## 3 本当の神をどのようにして識別するのか

### 1) 騒動

人々はこれを見て驚きます。バルナバをゼウスと呼び、パウロのことをヘルメスと呼んで、神が下って来たのだと大騒ぎになります。ゼウスもヘルメスもギリシャや地中海沿岸地域で信じられていた神々の名前です。雄牛数頭をほふり花輪もつくって神殿に献げようさえする。

さすがにパウロとバルナバは、これを止めに入ります。理由は二つある。一つ目。聖書では、天と地を造られた方だけが唯一の神で、それ以外の物や人を神と呼ぶことは罪になります。これはすぐに止めなければなりません。そして二つ目。まことの神を伝えるためにやって来たのに、ゼウスやヘルメスをあがめ始める。これでは何のために宣教しているのか分からない。すぐに正しい理解に導かなければなりません。

### 2) 自然の中に啓示される神

それでパウロはどうしたか。ユダヤ人を対象に語るときは、ユダヤ人が信じている旧約聖書を開いて神を解き明かしました。ところが今彼は異邦人に語っています。旧約聖書のことは知りません。そこでパウロは、こう話し始めます。15節後半から。「あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにしておられました。それでも、ご自分を証ししないでおられたわけではありません。あなたがたに天からの雨と実りの季節与え、食物と喜びであなたがたの心を満たすなど、恵みを施しておられたのです。」

典型的な日本の家にはほとんど仏壇があり神棚があります。子どもたちは、親がそれを拝んでいる姿を見て育ちます。村を歩けば神社仏閣があり、お地蔵さんがあり、馬の神、水の神もいました。それぞれに何か霊的なものが宿っているのだろうと信じて拝んできました。リステラの人たちも同じです。

私もそうでしたが、聖書のことなど聞いたこともない。そんな人たちがどのようにして本当の神を知ることができるのでしょうか。聖書を読まないとかわからないのか。いや、そうではない。あなたがたの周りにある天と地とその中のものを見てください。なぜ太陽は朝になれば東から上ってくる

のか。なぜ春になると鳥は卵を産み、子どもを育てるのか。なぜ天は雨を降らせ、秋になると畑にはたくさんの実が実るのか。畑から収穫してそれを食べるとき、私たちはどんなに喜びに満たされるのか。神は、私たちに必要なものを天から降らせ、与えてくださり、喜びで満たしてくださる。私たちの周りのものを見れば、あらゆるところに神の恵みを認めることができる。

### 3) 「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」

こう言うと、ある方は反論するでしょう。「日本人が信じている神も天から雨を降らせ、実りを与えてくださる。キリスト教だけが神ではない。いろいろな神を信じていいではないか。」

もっともに聞こえますが、ひとつだけ大きな違いがある。天と地を造られた神は、なにをしてくださるのか。ただ収穫物を与えるだけではない。私たちがかかえている罪をなんとかしなければと心配してくださる。本当のいのちを与えなければと考える。そのためにひとり子を天から下してくださった。ゼウスもヘルメスもそんなことはできません。このようにしてくださるのは、聖書の神以外にはない。

パウロが足の不自由な人に語ったことばは象徴的です。「自分の足で、まっすぐに立ちなさい。」親や先祖が信じてきた神をただなんとなく信じる、ではない。自分の頭でよく考えなさい。あなたのことを心配してくださる本当の神は誰であるのか。いつも何かを献げないと気分を害する気まぐれの神なのか。念仏を何度も唱えなければ願いをかなえてくれない、高いところにいる神なのか。それとも、私たちが罪から救うために、高いところから降りてこられて、十字架につけられいのちをお捨てになられ、三日目に死からよみがえられたイエスと呼ばれる方を神と信じるのか。どちらですか。

私はまだ信仰が足りないので、救われる資格はまだないとお考えでしょうか。足の不自由な人はどうでしたか。ただ心で願っただけです。「この苦しみから救われたい。」他に何もなし。小さな事と思いませんか。小さなことで結構なのです。ただ主が差し出してくださる救いの手をしっかりと握ってください。

最後に残っていた問題がありました。パウロの宣教のやり方は、愚かだったのかどうか。彼がリステラに難を逃れたことで何が起きたか。足の不自由な人が救われました。そのことを通して、町の人々に神を証しする機会が開かれていきました。す

べてマイナスと見えたことも、益に変えてくださる神のみわざです。